

闘病記の文法 死を生きるために

The Grammar of Hospital Diary: For Living the Death

小林昌廣

Masahiro Kobayashi

1

闘病記という記述について考えてみたい。

闘病記について、筆者はかつて次のようなことを書いたことがある。

「闘病記文学」などというジャンルは、じつは存在しない。だが、わが国におけるきわめて特異な表現形態である「闘病記」は、単なるドキュメンタリーや記録文学の領域内に収めることができないほどに多様であり、深さと広さをもっているのだ。ひとことで云えば、「身体の変貌」の明晰な記述の体系、それが闘病記である。

闘病記が日本固有であるのは、文学における「私小説」というジャンルがまた日本固有であることと正確に重なっている。私とその周囲に起こる事件ならざる事件を、ひたすら克明に記述してゆくような、いささか偏執的な視線を私小説がもっているとすれば、闘病記は、その視線をもっぱら自らの身体に注いでいるのである。

『InterCommunication』No.33（NH出版、二〇〇〇）

う体験が可能になっている。

だが、闘病記が自己（作者）を不断に襲った病いとの対決（人はそれを「闘病」とか「耐病」とか「病友」とか云う）のありさまを徹底的に自己の身体という視点から記述しているという方法論をもっているという点は変わらない。

方法論と云ったけれども、事務的な文書や形式的な手紙とちがって、闘病記は日記や小説同様に、確固たる記述の方法論が存在するわけではないだろう。「身体の変貌」の明晰な記述の体系、と以前は表現したけれども、闘病記が「肉の告白」であるという考えは、いまも変わらないでいる。

そして、闘病記が日本の私小説の伝統の流れのなかに位置づけられているという見解は、闘病記の「作者」の多くがプロの作家ではないという事実から検証してみれば、必ずしも当てはまらない意見かもしれないが、小説的な修辭（それを方法論と呼ぶこともできるのかもしれない）という技巧があまりなされていない「文学」の一類型として読むことも可能ではないかと思っている。

けれども、大きくちがっているのは、その読まれ方である。

この文章が書かれた当時と「書く」という状況が圧倒的に異なっているのは、書物というカタチで書かれるだけでなく、ウェブサイトやブログという表現形態が利用されるようになっているということだろう。だから、闘病記の「読者」もまた、パソコンの画面を通してそれらを「読む」とい

私小説はあくまでも読者にとつてはフィクションであり、それが現実の生々しい題材を得て血を噴出すように、あるいは内臓を吐き出すように書かれたものであったとしても、いったん「文学」の系譜に並べられれば、それらは「鑑賞」の対象となり、「読書」という最近ではあまり聞くことのないごく個人的な嗜好ないし行為の一環に据えられることになるだろう。私小説の系譜のなかに「病妻モノ」と呼ばれるジャンルがある。島尾敏雄の『死の棘』など、そのもとも代表的な例であろうが、そこには確かにトシオとミホとの生々しい現実がある。そしてミホが精神を病み、トシオや子どもたちが次第に追い詰められてゆき、やがて家族全員がミホの入院をもつてひとまずの平穏を得る（おかしな表現だが本当の現実ではこれではすまないのだが）というプロセスを辿ることができる。似たような経験をした読者もいるだろうし、まったくリアルな出来事として日誌を読むように頁をめくる者もいるだろう。しかし、読者の経験としては、読み始めようというモチベーションも含めて、『死の棘』に対する姿勢はあくまで「鑑賞」の域を出ないのではないか。